2014年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　14：50～15：50　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章は、岩手県遠野郷の伝説や民間信仰を記述した柳田國男の『遠野物語』について論じたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（50点）

山々の奥には山人住めり。栃内村和野の佐々木嘉兵衛と云ふ人は今も七十余にて生存せり。此翁若かりし頃猟をして山奥に入りしに、遥かなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳りて居たり。顔の色極めて白し。不敵の男なれば直に銃を差し向けて打ち放せしに、弾に応じて倒れたり。其処に馳け付けて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪は又そのたけよりも長かりき。後の験にせばやと思ひて其髪をいさゝか切り取り、之を綰ねて懐に入れ、やがて家路に向かひしに、道の程にて耐へ難く睡眠を催しければ、暫く物蔭に立寄りてまどろみたり。其間夢と現との境のやうなる時に、是も丈の高き男一人近よりて懐中に手を差し入れ、かの綰ねたる黒髪を取り返し立去ると見れば忽ち睡は覚めたり。山男なるべしと云へり。

（引用は柳田國男『遠野物語』より。以下同様）

いよいよ〈物語〉が始まるというこの第三話の「女」は、ことさら強く印象に残る。話の内容からして「山女」と書かれてもおかしくないものを、注意深くそう書くことが避けられ「女」とのみ印される。そして「美しき女」なのであり、「顔の色極めて白し」、「長き黒髪を梳りて居たり」、「黒髪は又そのたけよりも長かりき」と「女」であることが強調される。これは王朝の美学そのままといってもいい典型的な美人の描写である。これほどにも魅力的な女に出会った場合、普通はそこから話が展開してゆくはずだ。

しかしここでは「不敵の男なれば」という唐突なエクスキューズが差し込まれ、「女」は一言も発せぬまま撃たれる。このエクスキューズは、初めて『遠野物語』を読む者にはおや、と思うような唐突さであり、〈物語〉の進行上大きな空白が差し込まれた状態となっている。この空白にこそ『遠野物語』を特別のものにしている濃密な〈物語〉が潜伏しているのではないか。

(1) カジョウにと言って良いほど典型的な美人のイメージを附された第三話の「女」は、そのような美しい女が深山の岩の上など

という、本来いるはずのない場所にいるというおおきな驚きを誘う。その異常への強い驚きと怖れが「女」を人間以外の何物かにし、「不敵の男なれば」という衝動的な蛮勇を誘うのではあるまいか。同時にそこには深山で出会う「女」は人間ではなく、怪異の物であるという了解が潜伏している」ことが暗示されている。それは〈怪談〉としての了解であろう。

また、省略され、空白として差し込まれるこの暗黙の了解事項、いわば秘密は、第一話、第二話で語られた遠野という場と響きあって磁場を創り出している。しかし一方で〈文学〉でもあるこの物語は「女」がなまなましい「(2)」であることを描写してもいるのだ。読者は、この三面からの照らしに出会い困惑しつつ秘密を共有し(3)として巻き込まれてゆく。『遠野物語』の読者は第三話の銃声を聞き終えた時、遠野という土地と物語の神秘に巻き込まれてゆくのだ。第三話はここに置かれる他ない話なのである。

続く第四話でもやはり「若き女」が「根子立といふ山」に現れる。その「女」もやはり「極めてあでやかなる女」であり「長き黒髪を垂れ」ているのである。この「女」がジンジョウ[4]の者でないことは「足は地につくとも覚えず事もなげにこちらに近より」といった表現によって知らされる。第五話では「女」は登場せず、「笛吹峠」に「山男山女」がおり、怖がられているという話である。ここまで読んだ読者は三話四話で出会った「女」が「山女」であるのだろうと了解する。そして第六話においてもともとは遠野郷の者であった「女」が登場する。これも全文を引用しよう。

遠野郷にては豪農のことを今でも長者と云ふ。青笹村大字糠前の長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某と云ふ猟師、或日山に入りて一人の女に遭ふ。恐ろしくなりて之を撃たんとせしに、何をぢでは無いか、ぶつなと云ふ。驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。何故にこんな処には居るぞと問へば、或物に取られて今は其妻となれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食ひ尽くして一人此の如く在り。おのれは此地に一生涯を送ることなるべし。人にも言ふな。御身も危ふければ疾く帰れと云ふまゝに、其在所をも問ひ明らめずして遁げ帰れりと云ふ。

この話では「女」は村の長者の娘であったことが明かされ、撃たれずに済む。この話でも「女」は「一人の女」とのみ表現され、セクシャルな表現が付加されていない。そのことによって［(5)］の暴走が抑止されていよう。この話は第三話のヘンソウ[(6)]として考えることもできる。山で出会う「女」は人間以外の怪異の物であるという秘密を共有している男が、山奥で出会った「女」に怯え、撃とうとするのだ。だが、「女」の方から声をかけられ会話が成立することによって、怪異の物は人間となり村人となる。宙づりのヒョウショウ[(7)]としてあった「女」のこの着地において、〈怪談〉は「目前の出来事」となる。この着地を強調するかのように、柳田は、糠前という土地についての注を施し、これが土地に纏わる実話であることを念押ししている。

また、ここでの「女」は、「山」に現れる怪異の物として、同時に懐かしい村人として、二つの性格を持っており、この「女」が両方の世界の住人であることが、重要な働きをしている。「女」は猟師に「山」から去るように命じることで、単なる元村人なのではなく、この「山」の住人としての性格を確かにしていると言えよう。この、村人であり山人でもある「女」の登場によって、「山」という場は神話や夢まぼろしではなく、遠野の村の続きに「現実の事実」としてしんしんと控えていることになる[(8)]。この話はそういう意味で、〈怪談〉からの照らしをより強く受けてきたここまでの話の流れが、〈民俗学〉からの照らしをより強く受けるようになる場面であると言えよう。読者にとっては非現実と思われた出来事が現実の側にゆるやかに繋がり、この〈物語〉が遠野の物語であることをナットク[(9)]させられるのである。

同時にここにおいて『遠野物語』における独特の「山」世界が誕生するとも言える。この話の「山」は、村の続きにありつつ、「人にも言ふな」「疾く帰れ」という「女」からの命令により、また閉じられる。「山」は「女」によって導かれ、開け、そして閉じられる世界に他ならない。逆に言えば、「女」[(10)]の現れるところに「山」が現れるのだ。「女」は村人と怪異の物を往還する者であり、同時に村と異界、村と「山」を往還する者である。そのことが畳みかけられるように語られるのが第七話第八話である。七話では「上郷村の民家の娘」が「栗拾いに山に入りたるまま帰り来たらず」、「女」となって「五葉山の腰のあたり」の「大なる岩の蔽ひかゝりて岩窟のやうになれる所」に現れる。やはりこの「女」も「山に入りて恐ろしき人にさらはれ」子供を産む。そしてやはり猟師を村へ帰すことで「山」を閉じるのである。

そして第八話では「女」による「山」と村の往還はより決定的な「目前の出来事」「現実の事実」として語られる。

黄昏に女や子供の外に出て居る者はよく神隠しにあふことは他の国々と同じ。松崎村の寒戸と云ふ所の民家にて、若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎおきたるまゝ行方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或日親類知音の人々其家に集りてありし処へ、極めて老いさらぼひて其女帰り来たれり。如何にして帰つて来たかと問へば、人々に逢ひたかりし故帰りしなり。さらば又行かんとて、再び跡を留めず行き失せたり。其日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、けふはサムトの婆が帰つて来さうな日なりと云ふ。

ここでは「若き娘」が「神隠しにあふ」ことによって「女」となり帰ってくる。この「女」もやはり「跡を留めず行き失せ」るような、異界の物としての性質を帯びている。この「女」は村人であると同時に、異界の物でもあるのだ。おそらくは「山」に攫われていったであろうこの「女」は「松崎村の寒戸と云ふ所の民家」と「山」あるいは異界とを往還し、そのことは村人の中で「サムトの婆」の伝説として共有されてゆくのである。この時、読者は、一つの事実としてこの伝説を共有することになり、遠野物語という共同体の住人となる。そのようにこの物語は配列されているのである。

このような第一話から第八話までの流れは、遠野という現実の場と「山」という異界とを無理なく接合し、遠野物語というあらたな場を創り出すよう働いていよう。具体的な村の名前や家まで特定できる「現実」と、異界である「山」、現実らしい場面から非現実らしい場面へ、その両方の世界が不思議な融合を果たしてゆくのが第八話までの流れなのだと言える。

そのなかで、「女」は、あるいは誘い、あるいは制止し、あるいは禁止し、不思議な体験をさせつつ「山」を創り出し、同時に村との繋がりもつけてゆくという役割を果たしている。「女」は現実世界と非現実世界の境界を軽々と越え、両者を縫い合わせるよう動いて重要な役割を果たしている。人間と異界の物の両方の顔をもつこの「女」によってこそ現実と非現実ふたつの世界はアマルガムされるのだ。

（川野里子「万華鏡世界の真ん中」〔『現代思想』二〇一二年十月号〕による）

注　アマルガム……融合・混合

〔問一〕　傍線(1)(4)(6)(7)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　空欄(2)に入れるのにもっとも適当な二字の語を、(2)より前の本文中から探し出して答えなさい。

〔問三〕　空欄(3)(5)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

(3)　A　敵対者　　B　理解者　　C　観察者　　D　共犯者　　E　協力者

(5)　A　恐怖　　B　空想　　C　激情　　D　不安　　E　憤怒

〔問四〕　傍線(8)「遠野の村の続きに「現実の事実」としてしんしんと控えていることになる」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　その場が村の延長線上にあって、村人の現実生活の場として黙々と生きられるようになるということ。

B　その場が村に隣接しつつ、村人の記憶の中に不気味な現実としていつまでも残存するようになるということ。

C　その場が村に隣接しつつ、特異な出来事により独自の現実としてひそやかに存在するようになるということ。

D　その場が村の一部として、村人の見慣れた風景の中に鮮明な現実性をもって現前するようになるということ。

E　その場が村の一部として、怪異な出来事により読者の空想力を尽きることなく喚起するようになるということ。

〔問五〕 傍線(10)「「女」の現れるところに「山」が現れるのだ」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 昔話では主人公になることが多い女が、昔話の神秘に満ちた空想的な世界を村人の前に現出させること。

B 怪異の物としての女が、通常村人の目には見えていない神秘で不思議な異界を村人の前に現出させること。

C 村から追われて山に生きざるをえない女が、その特殊な日常生活を営む空間を村人の前に現出させること。

D 村人たる女が、村と山を往還するなかで、村という日常生活の場と異なる、怖く不思議な異界を現出させること。

E この世ならぬ美しさを持つ女が、遠野郷山中に位置する特定の場を、怪奇な出来事の場として現出させること。

〔問六〕 本文に題をつけるとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 『遠野物語』における「山」の神秘性

B 『遠野物語』における「女」の役割

C 『遠野物語』における「山」の人生

D 『遠野物語』における「村」と「女」

E 『遠野物語』における〈民俗学〉と怪異現象

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の筆者の考えと合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 深い山間に暮らす住民は「山男山女」と呼ばれ、生活様式の違いのため村人から怪奇な存在とみなされている。

イ 『遠野物語』が読者に伝える夢幻的、非現実的な雰囲気は、この物語の持つ〈怪談〉という側面に由来している。

ウ 「事実」として共有された村人の怪異な体験を読書により追体験した者は、その物語世界に巻き込まれてゆく。

エ 土地や人物が特定されることによって、『遠野物語』は独自の文学的性質を備えた〈民俗学〉の形を示すことになった。

オ 「女」は、怪異の物として生きる非現実の世界と、元の村人として生きる現実の世界を融合しがたく分裂させる存在である。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

近代的な権力が、どのようにして、その作動を確保するかということについてのミシェル・フーコーの研究は、あまりにもよく知られている。フーコーは、規律訓練（ディシプリン）を媒介にする従属によってこそ、身体は個体として主体化されるのだということを、論証しようとした。従順な主体をつくり出す規律訓練の方法の典型こそが、体育である。

非常に多数の人間が全員できちんと整列して、きちんと行進する。このようなことができる身体は、典型的に規律訓練化された従属者＝主体としての身体である。だから、体育の誕生という現象は、フーコーが見出した「近代的権力」の様態にぴったりと適合する事実である。

舞踊する身体から体育の身体への移行という現象は、フーコーが描き出したような、前近代的な王の権力から近代的な規律訓練型の権力への転換という事態に、あざやかにフィットしている。つまり、これは、フーコーの権力についての把握の妥当性を支持する証拠となっているのだ。

このことに気づかせてくれるのは、今日、われわれが、舞踊を、どちらかというと、女性的なものだと思う傾向がある、という事実である。こういうイメージが確立されるのも、一九世紀だ。それ以前は、特に女性が舞踊の中心的な担い手であったわけではない。舞踊の中心はむしろ男性であり、それは男性的なものですらあった。ところが、一九世紀になったときに、男性の身体が、いわば体育の方に配分され、（主に）女性の身体が、舞踊の方に配分されたのである。

一九世紀において、体育と舞踊が、それぞれ、男性と女性に配分されたのはなぜか？　舞踊は、言うまでもなく、見られることを前提にした身体の動作である。だから体育と舞踊の間の性別分担は、少なくとも一九世紀の段階において、女性は見られる客体に、男性の方が見る主体になったことを意味している。

しかしこうした区分は、一九世紀より前にはなかった。実際に、絶対王政期までの王はしばしばダンスをしている。[1] 王だけではなくて、高貴なるものは男も含めて非常に頻繁にダンスを行った。かつては、軍人もまたよく踊っていたのだ。舞踊は軍人の

必須の技能だったのである。さらに翻ってみれば、日本でも、戦国武将は、よく舞を舞っている。

これらの事実が示していることは、王の身体や、その他の高貴な身体、さらにそのもとにあった軍人は、社会の中で見られるべきものとして定位されていたということである。フーコーは、前近代の王の権力は、王の身体が人々の前に華々しく現前することによってこそ確保された、と論じている。王がよく踊ったということは、権力が、フーコーが述べたように、頂点に立つ者の従属者への現前によって作動していたということを、裏づけているのだ。王の身体は、他の身体にまして見られることにおいて特権的なのである。見られる者こそが、最大の威信を担ったのだ。

しかし、近代になったときに、見られることは、人々に見られるということは、権力者の条件ではなくなってしまう。むしろ見られる身体、客体化される身体は、従属的な身体、つまり女性の身体である。だが、それは、近代的な「主体」の方を特徴づける条件ではなくなった。

舞踊する身体は、それを眺める、共同体内の他の身体の視線に対して存在している。では、体育の身体は、何あるいは誰に対して存在しているのだろうか？　それは、見られることを想定していない身体なのか？　その通りであるとも、そうでないとも言える。それは、舞踊する身体のように、その単独の壮麗さによって見られるわけではない。体育の統制された身体が、相応の「美」を呈するのは、それらが、ほとんど無数と言いたくなるほどにたくさん集合して行動しているときである。体育の身体は、きわめて多数の身体を一挙に捉えうるような視線に対して、自らが見られることを想定しているのである。

そのような視線はどこに存在するのか。無数の身体を一挙に同時に捉える視点は、上空に、理論上は無限遠の上空に存在している。無限遠からの視線だけが、無限個の身体を均等に同時に把握することができるはずだ。もちろん、無限遠点は、社会内のどこにも存在してはいない。その意味で、それはまったく抽象的な点である。体育する身体も見られることを想定しているわけだが、見る者は、王を見るときのような周囲の具体的な人々ではない。それは、社会内のどの人をも担い手とすることができないような抽象的な視線によって見られていることを、想定しているのである。それは、いわば見えないものによって見られているのだ。

一八世紀までの権力では、権力の頂点にいる者こそが見られ、権力の下にいる者が見た。フーコーの考えでは、一九世紀以降の権力にあっては、関係が逆転して、権力に従う者こそが見られている。しかし、見る／見られるという関係が単純に入れ替わるだけではない。こうした逆転が生ずるのは、近代的な権力関係において見ているのが、共同体のメンバーではなくて、共同体の内部に特定できない抽象的な視点になっているからだ。つまり、誰も、自分を見ている視線を直接には知らない。

体育の身体が、集合的にのみ見られることを想定しているということは、たとえば、閲兵式や観兵式のときにあからさまになる。観兵式や閲兵式では、政治的な指導者――君主制が残存した国家では近代的君主――が整然と並んだ軍隊を見る。だから、軍隊の中で鍛えられた体育の身体も、独特の仕方で見られることを前提にしている。ただ、それは、民衆から見られるのではなくて、権力の方から見られるのであり、そして、その権力の原点は通常は抽象的で不可視だったのである。

体育という技法が、どのような身体を構成することになるのか。あらためて簡単に整理しておこう。第一に、身体の個体性（インディヴィジュアリティ）が構成される。逆説的に聞こえるかもしれないが、権力の視線によって集合的に対象化されることによってこそ、かえって、身体は個体として主体化されるのだ。軍隊であれ、学校であれ、集合的に規格化されているがゆえに、個人としての能力が評価され、個人の資格において主体化される。このことは、学校のテストのことを思うとただちにわかる。個人の集合を一挙に対象化しうる視線のもとで、個人が標準化されているがゆえに、その標準化された能力に関して、一斉にテストを行うことができるのであり、またその結果によって諸個人を差別化することもできるのだ。

第二に――このことと表裏一体の関係にあるのだが――、「身体の抽象化」とでも呼ぶべき事態が成立している。体育が目指している「身体」は、比喩的にいうと、「貨幣のような身体」である。貨幣それ自体は商品ではない。しかし、別の商品に転化することができる。これと同じように、(2)こそが、体育によって目指されている身体ではないだろうか。舞踊する身体は、それが内属している共同体の文化によって、初めから色づけられている。それは、共同体の中で実践的に規範化されている、リズムや動作によって、最初から規定されている身体である。これに対して、体育において目指されている身体は、アプリオリな色づけから脱した身体である。そのことによって、体育は、潜在的には何にでもなりうる身体を、その理想としているのだ。

（大澤真幸『生権力（せいけんりょく）の思想』による）

注　ミシェル・フーコー……フランスの哲学者、歴史学者（一九二六～八四）

〔問一〕傍線(1)「王だけではなくて、高貴なるものは男も含めて非常に頻繁にダンスを行った」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　一八世紀以前には、規律訓練としての舞踊がいまだ形成されず、加えて権力者は従属者の視線の先に存在すべきであると考えられていたから。

B　一八世紀以前には、女性が舞踊の中心的担い手ではなく、従属者に仰ぎ見られる地位にあった王侯や軍人が身体的表現を独占していたから。

C　一八世紀以前には、多くの従属者の視線にさらされることが権威者の要件と考えられており、舞踊は権力の誇示に適合した技能であったから。

D　一八世紀以前には、女性が見られる客体であるという舞踊の近代性が未構築であり、男性の権力の示威のために舞踊が用いられていたから。

E　一八世紀以前には、体育と舞踊の性別的適正が意識されなかったうえ、権威者を仰視させることが舞踊の主要な役割としてとらえられていたから。

〔問二〕 空欄(2)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A それ自身は意義を持たないが、それが媒介となり、共同体内の個々人にすべての色付けを施せる抽象的な身体

B それ自身が標準化されているために、舞踊の規範性、体育の規律訓練性のいずれにもなじみ得る抽象的な身体

C それ自身は透過透明的で、権力を行使し、あるいは行使される、いかなる立場もとり得る抽象的な身体

D それ自身としては何者でもなく、空白なのだが、どんな者にも変換する可能性をもっている抽象的な身体

E それ自身が交換不能な価値を持っているにもかかわらず、逆に、あらゆる個人に変容し得る抽象的な身体

〔問三〕 本文中における「体育の身体」とはどのようなものか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 権力者を仰ぎ見ていた段階を経て、主体が無数の視線にさらされる存在となって全体の中に埋没し、個として解放されていくもの。

B 社会の特定の権力者に見られることで個人が集合的に従属するようになり、かえってそれぞれの主体性が強められていくもの。

C 個々は壮麗でも統制のなかった舞踊をする身体がしだいに変容していき、権力により均一化されるに至り、主体性が形成されていくもの。

D 他者からの監視の視線によって対象化されることで、権力に従順な共同体から、やがて一人一人の主体へと解体されていくもの。

E 不可視な権力からの視線にさらされることで身体の規格化が生じ、そのことによって、逆に主体的な個となっていくもの。

〔問四〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　前近代では、権力者が個々具体的な人々によって見上げられていたが、近代では、民衆が抽象的な権力の視線にさらされるようになった。

イ　閲兵式や観兵式も、政治指導者からではなく民衆によって見られる場合には、戦国武将の舞と同様の個性的美を認めることができる。

ウ　舞踊は個人の振る舞い自体が美となり得るが、体育においては、多数の身体が整然とした統制的な動きをとる際にはじめて美が生じる。

エ　近代以降、個人は、権力者が統治する共同体の中で主体的に振舞わなければ、規律訓練化された体育的身体から逃れることはできない。

三　次の文章は、体調のすぐれない若き日の一休を案じて、周りの人々が見舞いに来た場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。（30点）

一休出であひ四方山の物語済みて、一人申し出だしけるは、「この間さまざまの御療治にても、御脈は常に変はらずと医師おのおの申すなり。平生には違ひて、何とて心深く渡らせ給ふぞや。[1]さだめて恋をなさるると見つけ侍るは、ひが目か。有りのままに仰せられよ。かなへて参らせむ」と、打ちつけて申しける。一休いかにもうれしげなる御かほばせにて、「この上は何をかさのみ隠すべし、この日ごろ恋ひわびて、さてかくのごとくやつれはてて候ふ[2]なり。よくこそ仰せ出だされたり。何とやらん、我らには合はぬ事にて侍れども、おのおのは日ごろのよしみなれば、ひとへに沙汰[3]なくかなへてたべ。さりながら、[(4)]による物ならなくに、心みだれてはづかしや。それぞと[(5)]をば面上にてのべがたし。一筆かきて参らすべし。門外へ出で給ひて、おのおのひらき御覧じて、いそぎかなへて給はば、我らが[(6)]はながらへて、おのおのにはその替りによき[(7)]教へ仕まつらん。」とて、おくの間へずんど入り、一筆さらりと書きて引きむすび、彼の三人に渡し給ふ。

三人喜び、「[8]御心やすく思しめせ」とて罷り出で、門外へ走り出でて、「[9]さてこそ申さぬ事か」とて、急ぎその名の知らまほしくて、彼の文開きて見れば、御歌あり。

Ⅰ　本来の面目坊が立ち姿一目見しより恋とこそなれ[10]

Ⅱ　我のみか釈迦も達磨も阿羅漢もこの君ゆゑに身をやつしけり

と書かれたり。三人のもの共、[11]案に相違して、よこ手をはたと打ち、「ひごろの御心もしらぬ身が、あらぬわざを思ひけるこそをかしけれ。今にはじめぬ御どうけに、たばかられけるこそおろか[12]なれ。まことに有りがたき御僧かな。画にうつし本にきざめるはおほけれど、わたもちの釈迦如来[13]なり」と、おがまぬ人はなかりけり。

（『一休ばなし』による）

注　わたもち……腸持ち。生きていること。

〔問一〕傍線(1)(3)(8)(9)の解釈としてもっとも適当なものを、それぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(1)　心深く渡らせ給ふぞや

A　十分気をつけてお出かけになるのか
B　深刻そうなようすでいらっしゃるのか
C　慈悲深いようすでお話しになるのか
D　心配そうに医者を呼び付けなさるのか

(3)　沙汰なくかなへてたべ

A　あれこれ言わずに力を貸してください
B　どうかとがめず見逃してください
C　何もせずやり過ごすべきなのです
D　人には言わずにいるべきなのです

(8)　御心やすく思しめせ

A　ゆっくりとお休みください
B　信頼してくださっていますね
C　どうか安心なさってください
D　気安く話をされるものですね

(9)　さてこそ申さぬ事か

A　だからずっと言えずにいらしたのだ、聞いてよかった
B　これは秘密にするべきだろうか、やはり黙っておこう
C　よくそのようなことが言えたものだ、全く失礼な方だ
D　ほら言わないことではない、言ったとおりではないか

〔問二〕　傍線(2)(10)(12)(13)の文法的説明としてもっとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてもよい。

A　断定の助動詞　　B　伝聞の助動詞　　C　動詞　　D　形容動詞の活用語尾

〔問三〕　空欄(4)～(7)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

A　道　　B　命　　C　糸　　D　水　　E　名

〔問四〕 次の文はⅠ、Ⅱの歌についての説明である。空欄(ア)～(ウ)に入れるのに適当な語を、それぞれA、Bから選び、符号で答えなさい。

Ⅰの歌は、衆生の持つ仏性を [(ア)] にたとえ、また仏道希求の思いを恋心にたとえてよんだものである。Ⅱの歌は、仏道修行に励む姿を、[(イ)] と表現したものである。いずれも二人の勘違いを利用した一休の [(ウ)] があらわれた歌である。

(ア) A 本来の面目　B 坊が立ち姿

(イ) A この君　B 身をやつしけり

(ウ) A 御どうけ　B あらぬわざ

〔問五〕 傍線(11)「案」の具体的な内容をあらわす言葉を本文の中から十字以内で抜き出しなさい。（句読点は一字に数えない）

〔問六〕 次の文ア～オのうち、この文章で述べられた一休の人柄と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　一休の仏道を究めようという思いは、体調を崩してしまうほど強いものであった。

イ　一休は場面に応じて機転の利いた和歌を瞬時に作ることができる教養を身につけていた。

ウ　一休は有名な僧であるにも関わらず、色恋ゆえに体調を崩してしまう一面もあった。

エ　一休は日ごろからおどけて人をまどわせるようなことをしばしばする人物であった。

オ　一休は釈迦、達磨、阿羅漢たちの仏道希求の精神を、自分とは比べものにならないものだと考えていた。